NO.96
平成16年4月1日発行

SHIMIN PHOTO
市民フォト

KAGOSHIMA

鹿児島

屋外のオブジェ

Outdoor Objet

【春のよろこび】

～天保山橋近く～

CONTENTS

【特集】かごしまの駅……3

クローズアップ……12
齊藤裕子さん

学校探訪……14
紫原中学校

カメラトピックス……16

ハロー鹿児島……18
ティエリ・ブスケさん

私の好きな場所……20
中根総子さん

ふるさと再発見～美術編～……22
海老原喜之助

あなたのフォトサロン……24
鹿児島玉龍高等学校写真部

よかタイム……26
谷之口勇さん

街角ウォッチング……27
草牟田周辺

わが家の味じまん……28
佐田さん夫婦と
鹿児島商業高校下宿生の皆さん

館のたからもの……29
市立科学館

わが町上空 支所編……30
東桜島支所周辺

★表紙写真説明

待ちに待った九州新幹線開業。友達3人、楽しい旅の始まりです。

（鹿児島中央駅新幹線ホーム）

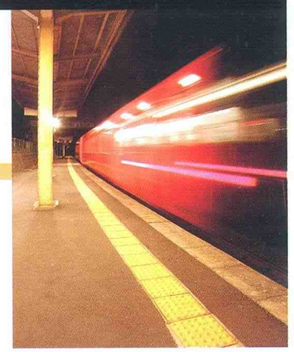
特集

かごしまの駅

飛躍する鹿児島の中心駅

鹿児島中央駅 大正２年10月11日 開業

市内には11の駅がある



市内最南の駅

平川駅 昭和９年５月20日 開業

市内で鹿児島中央駅に次いで利用客が多い

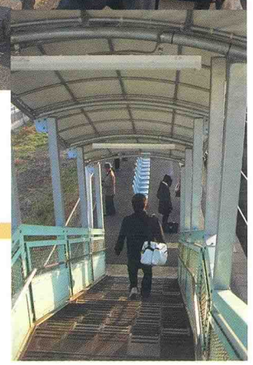
坂之上駅 昭和41年10月１日 開業

のどかな日差しが似合う

五位野駅
昭和５年12月７日 開業

白いアーチが目を引く

慈眼寺駅 昭和63年３月13日 開業



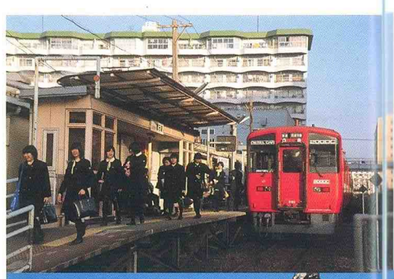
谷山地区の中心

谷山駅 昭和５年12月７日 開業

谷山駅　慈眼寺駅　坂之上駅　五位野駅　平川駅

海と山に挟まれた静かな駅

竜ヶ水駅 大正4年8月7日開業



学生でにぎわう駅

郡元駅
昭和61年12月1日 開業

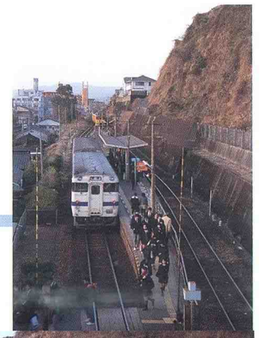
住宅地の中にある駅

宇宿駅 昭和61年12月1日 開業

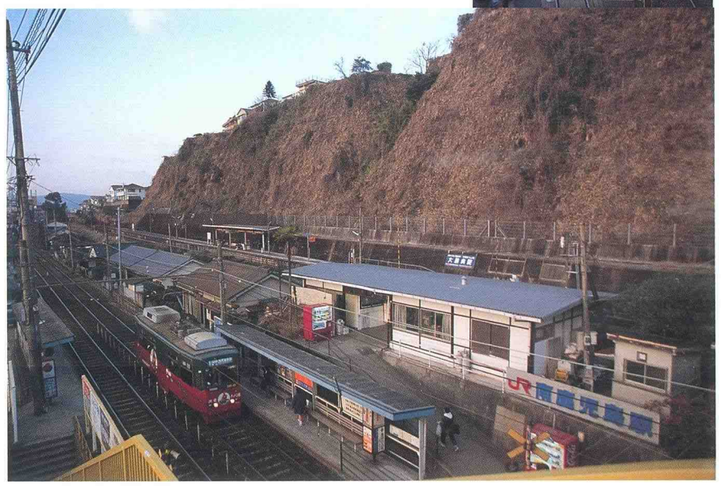
歴史の重みが残る

鹿児島駅 明治34年6月10日 開業

列車と市電が並んで止まる



南鹿児島駅
昭和19年10月1日 開業

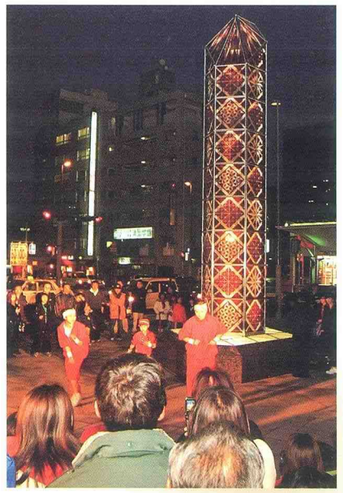


竜ヶ水駅 | 鹿児島駅 | 鹿児島中央駅 | 郡元駅 | 南鹿児島駅 | 宇宿駅

鹿児島中央駅

3月6日
駅前広場 完成記念式典

西口広場、東口広場、時計塔など次々とお披露目され、テープカットには平川動物公園のコアラも参加した



夕暮れを待ち、西口広場の新たなシンボル切子燈の点灯式が行われた

広く明るい地下通路「つばめロード」

3月13日
九州新幹線 開業
鹿児島中央 ― 新八代 間

午前6時　人々の期待を乗せ、つばめ第1便が鹿児島中央駅ホームから発車

午前4時50分　新駅名がライトアップされた

東口広場での開業記念式典

出発式に先立ち、新幹線改札口前では4世代の家族によるくす玉開きが行われた

「向かう」人々が集まる場所

さまざまな人々が行き交う駅。朝は職場へ学校へ。夕方はそれぞれの家へ。買い物をするために、人に会うために、新しい体験をするために、美しい景色を見るために、「向かう」人々が基点とするのが駅である。

一見何気ないように見えて、この「向かう」という行為が街や人を動かすエネルギーになっているのではないだろうか。

九州新幹線の開業で鹿児島は新たな一歩を踏み出した。生まれ変わった鹿児島中央駅を陸の玄関として、いかに人々をひきつけ、そのエネルギーを集積することができるか。

そこに鹿児島の未来がかかっている。

駅は人々の心のふるさと そして、その街の 印象を決める

市長に聞く

明るさと南の薫り漂う これぞ鹿児島の陸の玄関

鹿児島が大きく飛躍するエネルギーを運んでくれる九州新幹線が開業し、これに合わせて鹿児島中央駅前広場も見事に生まれ変わりました。鹿児島の陸の玄関にふさわしい全国に誇れる駅前広場になりました。

初めて訪れるその街の思い出は駅に降り立った第一印象から始まります。観光鹿児島の魅力を直感していただけると思います。

また西口広場の整備には地元の皆さんが一生懸命努力してくださったのがうれしかったですね

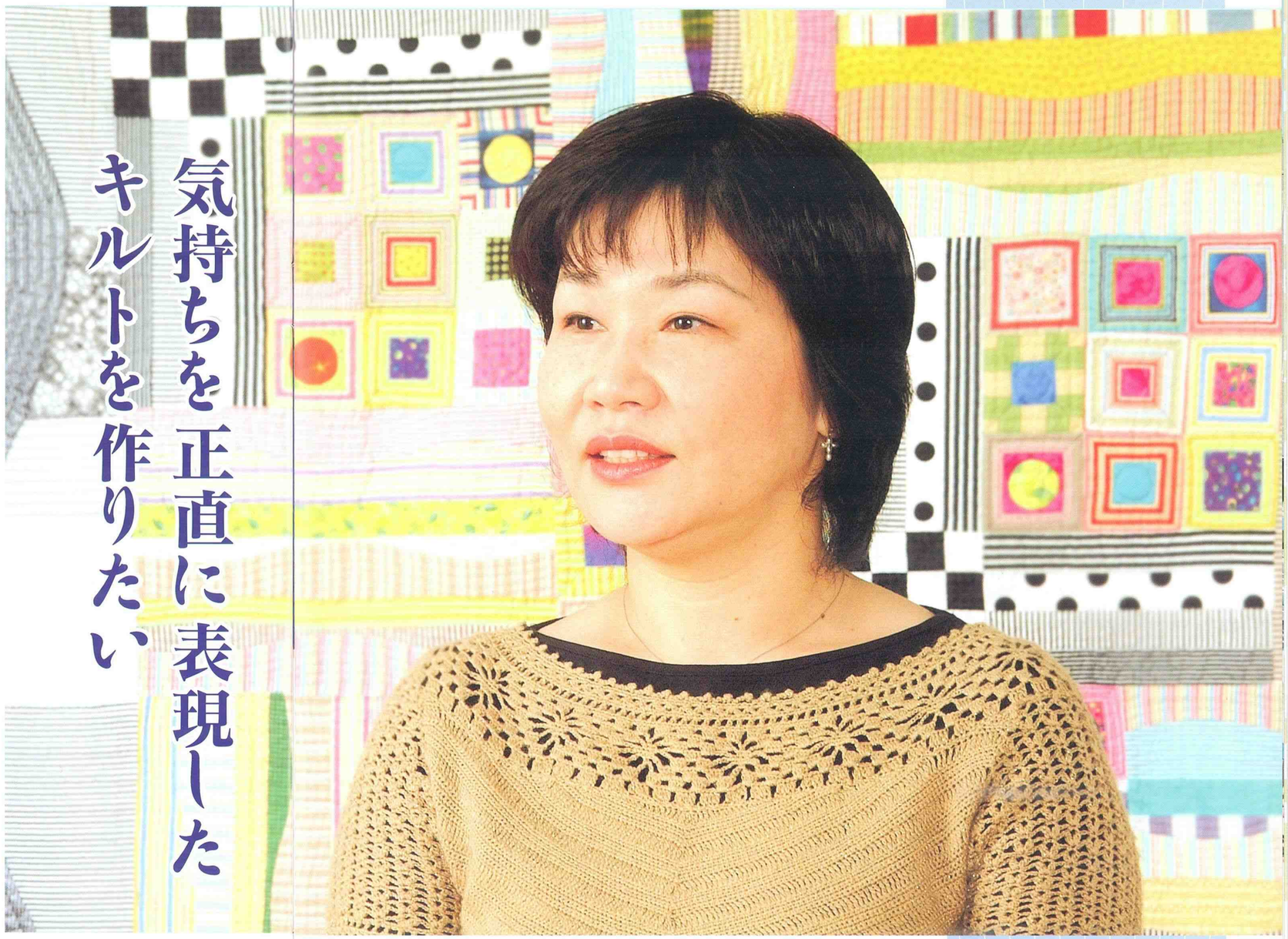
青春時代を過ごした駅への思い

私の若いころは交通手段といえば汽車でした。私は通学と通勤に汽車を十数年間利用しました。汽車は若いころの私を育ててくれたといえます。そのころのふるさとの駅舎や列車内の楽しい会話が今もよみがえってきます。

市民の皆さんも汽車に乗ってふるさとを離れるときの感慨や、汽車で帰ってきて駅に降り立ったときの安堵感をそれぞれお持ちではないでしょうか。

駅はやっぱり心のふるさとですね。

気持ちを正直に表現したい キルトを作りたい



齊藤　裕子さん

略　歴

昭和33年生まれ。文部科学省許可キルトインストラクター。第3回日本キルト大賞創作部門1位。

Close Up クローズアップ

キルトは、上布の「トップ」、キルト綿の「しん」、裏布の三枚の布を重ね、縫い合わせたもの。

齊藤さんは昨年約2千点の応募があったキルトの国際公募展で、創作部門579点の中から一位に選ばれた。受賞作「キ・ラ・リ」。できあがったとき、キラキラ輝いて見えた。

形になって残る喜び

「縫いものはどちらかというと苦手で」。そんな齊藤さんがキルトを始めたのは、息子さんが通っていた幼稚園の手づくりバザーがきっかけ。手づくりしたものが形になって残る喜びがあって、子育てが一段落するとパートのかたわら教室に通うようになった。

今はサークルに参加、主にタペストリー(壁掛け)を作る。作品のなかには、アクセサリーのついたバックも。「これは屋久島で買った屋久杉のイヤリング。この髪留めは以前使っていたものです」。思い出の品や布を工夫して取り入れるそうだ。

考えた分いいものができる

今回の受賞作は、193×194センチのタペストリー。水玉とストライプを基調にしたデザインだ。「水玉や円のような丸いものが好きなんです。かわいらしいし、人の和を表しているような感じがするでしょう」。

デザインは、霧島で見た彫刻からイメージが湧いた。何度も考え、3カ月かけて決めた。布を裁断してデザインのとおり並べ、色など合わないときは並べ替え。配置が決まったら、「縫うのは勢い」。

受賞作はほとんど手縫い。ミシンを使うこともあるが、手縫いのほうが風合いが出る。「縫い始めたころ息子は高校受験の勉強中。息子もがんばっていると思って、ちくちく縫いました」。

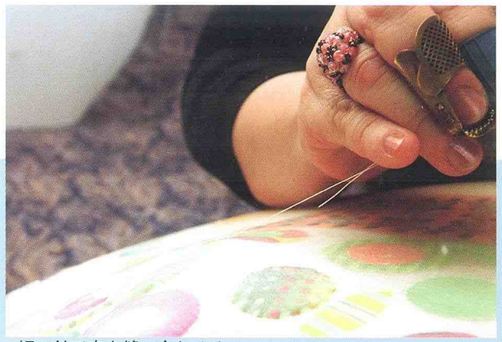
パートをして、家事をして、寝る前の2時間ぐらいが制作時間。「そんなに大変なのにどうしてがんばるの?」と子どもに言われたそうだ。

「キルトが好きだからこそがんばれるんですよね。今回の受賞を一番喜んでくれたのは子どもたちでした。夢に向かって努力したらできる、たくさん考えたらそれだけいいものができる。そういうことを子どもたちに感じてほしい」。

地方から自分を発信できた

仲間たちも大事な存在のよう。「普段、思うことを率直に言い合える場というのはあまりないですよね。サークルでは、作品を見ながら、ここはこんなふうにしたら、とか話します。それは刺激になって、素直に受け入れることができるんです」。

10月には所属しているサークルのキルト展も開催される。「今回の受賞で、地方に住んでいても自分を発信できることがわかりました。自分らしい、そのときの気持ちを正直に表現したキルトを作っていきたいですね」。



短い針で布を縫い合わせる。

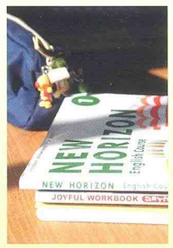
学校探訪

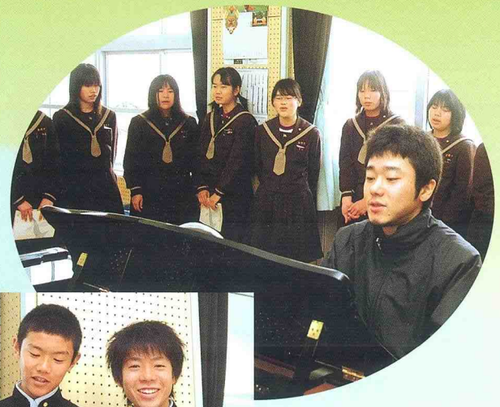
紫原中学校

チャイムの鳴らない学校

創立 昭和42年4月　生徒数 848人　（平成16年3月1日現在）

ALTによるクイズ形式の授業。笑顔が絶えない



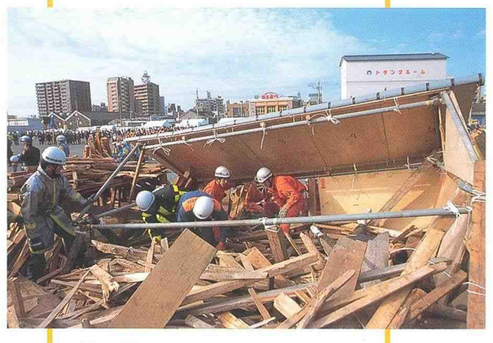


卒業式に向けて合唱の練習。曲名は「旅立ちの日に」

中学校生活最後のクラスマッチ。絶対負けられない

カメラトピックス

Camera Topics



1月15日
桜島火山爆発総合防災訓練
関係団体の職員、住民約4700人が参加。鹿児島本港南ふ頭では、倒壊家屋から人を救出する訓練などが行なわれました。

1月5日　中央卸売市場初せり
東開町の青果市場では午前7時の振鈴を合図に一斉にせりが開始され、にぎやかなかけ声が響きわたりました。

1月22日
雪景色（みなと大通り公園）

1月26日～2月27日
スポーツチームの鹿児島キャンプ
ジュビロ磐田（左写真）、千葉ロッテマリーンズなどが続々と鹿児島にキャンプインし、練習に取り組みました。

1月11日
西鹿児島駅前市電停留場移設
新幹線開業に向けた駅前広場整備事業の一つとして、県道上から東口駅前広場内に移設しました。

2月16日
新年度当初予算案発表
一般会計は約1901億円で、健全財政を堅持し、1市5町の合併や新幹線開業に対応した予算編成となりました。

2月中旬　ウメ（都市農業センター）

2月28日　共研公園リニューアル
鹿児島中央駅周辺の整備や新幹線開業に合わせ、ジョギングコースやフィットネスコーナーなどが再整備され、明るく開放的な公園が完成しました。

3月3日　合併協定調印式
11月1日の合併に向けて、1市5町の市長・町長が合併協定書に調印しました。

2月22日　ボランティアフェスタ
「みんなが参加　広がれ地域のボランティア」をテーマに活動の発表や、車いす、手話、点字などの体験がありました。

3月13日　春の木市
今年は新幹線開業日に合わせて始まり、5月5日まで甲突川河畔の市民広場で開催されます。

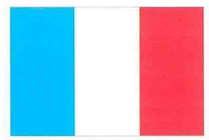
運命が世界を旅したフランス人と鹿児島を引き合わせた

休みの日は、この庭で家族一緒に朝食をとる。
後ろの自転車は舞子ちゃんのもので、「大事な娘をいつもそばに感じていたい」と言う

【フランス出身】

ティエリ・ブスケさん

Hello KAGOSHIMA



ティエリ・ブスケさん43歳。職業語学講師。鹿児島に来て3年になる。彼がここに今こうしているのは、半ば必然であった。

日本人女性との出会い

フランス南西部、山々に囲まれた小さな町カオ市。仕事はないが暮らしやすく、退職者が多いこの町が彼の生まれた地だ。6歳から近くの大都市トゥールーズに移り、そこで育ち、照明技師の職を得た。

29歳でパリに出て、世界中をツアーで回る劇団の専属照明技師になる。平成5年、初めて日本の土を踏んだ。

最近、ドラムを購入した。昔のロックバンドのメンバーを思い出しながら、25年ぶりにたたいている

その時東京のレストランで隣り合わせた日本人女性と知り合う。3年後、再びツアーで来日。再会は、彼女への思いに火を点けたらしい。離日してからも、旅先から毎週末必ず電話した。一回たりとも欠かさなかったという。

その一生懸命さに心を打たれた。4カ月後「遊びにこないか」という誘いを受けて、彼女はフランスに飛んだ。あとは早かった。

几帳面でまじめなフランス人

平成10年、地中海に浮かぶキプロスで式を挙げた。劇団を離れフランスに帰り、娘舞子ちゃんが生まれる。イベント会社の照明技師としても勤め始めた。

だが、この生活は長くは続かなかった。まじめできっちりした、どちらかといえば日本人タイプの彼には、のんびり働くフランスが性に合わなかった。旅暮らしに慣れた身ゆえ母国を離れる抵抗感もなかった。

となると、奥さんである奈緒美さんの母国日本に住むのが道理というものだろう。人が多く疲れる東京や福岡は、下見したが受け入れられなかった。それならと、奥さんの実家のある鹿児島まで足を伸ばしたら、一目で気に入った。景観がよく、静かな環境は、彼の生まれた南仏の町によく似ていた。

今が一番幸せ

初めは日本語が分からず、おしゃべり好きなフランス人にとって、しゃべることができない苦しみを味わった。また、目を見て話さない、「ガイジン」と言われる、ケータイメールをしながら自転車に乗っている、保守的で変わることを認めたがらないなど、異文化社会に直面してうんざりしたことは事実だ。

しかし、小学生たちに救われた。恥ずかしがらずにさまざまな質問を浴びせかける彼らに、語学講師としてのやりがいを感じるのだ。

軌道に乗った鹿児島での家族一緒の生活。日本人の女性と結婚して、子どもが生まれ、鹿児島で生活する、それは彼の人生のさまざまな出会いと選択によって導かれた。

「今が一番幸せ」。透明だが水を入れると白濁する45度の故郷の酒、アニス入りリキュール酒「クリスタル」を空けながら、穏やかにほほえむブスケさん。傍らには、愛する家族がいる。

お義母さんの節子さんも一緒に家族4人で。
舞子ちゃんは4歳にしてバイリンガル

私の好きな場所

My favorite Place

薩摩ガラス工芸株式会社 勤務

中根　総子さん

昭和37年兵庫県尼崎市生まれ。
東京ガラス工芸研究所を卒業後、尚古集成館に勤務し薩摩切子復元事業に携わる。
西部工芸展や九州ガラスアート展など数々の入賞歴がある。

錦江湾上から望む市街地の夜景

そのガラスの変化と自然の変化は似てるんです。鹿児島市内に向かう桜島フェリーに乗り、進行方向を眺めていると、日中の太陽の光の色から夕暮れのあかね色に刻々と変わり、そして街にぽつぽつと明かりがつき始め、やがて明るい夜景となる。しかし、空の方に目を向けると、さっきのあかね色がまだ空を染めている。

群青色（ぐんじょういろ）の海とあかね色の空、そして市街地の光、この三つが一緒になる、そんな時間による光の変化を感じられる風景が好きです。フェリーの速さと夕日が沈んでいく時間もいい感じで調和してるんですよ。それに、同じ場所で見る景色でもその日によって姿が違うのがガラスと同じで創作意欲をかきたてるんです。

私がガラスに興味を持ち始めたのは、小学校5年生くらいのとき。デパートでガラス細工の催しがあったんです。職人さんの技に心ひかれました。まるで手品のようで、ずっと見ていても飽きなかったですね。このときガラス職人になりたいなって漠然と思ったんです。

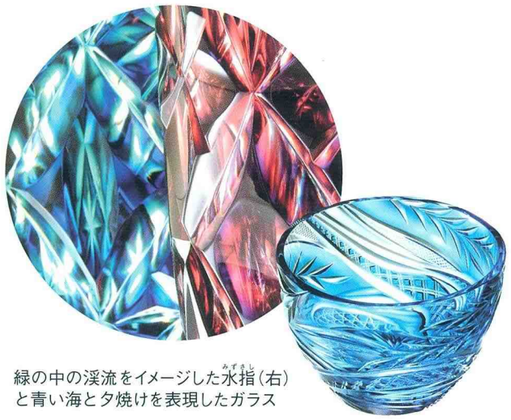
ガラス専門学校を卒業後、故郷の熊本でガラス作家になる準備をしていたんですけど、直前で薩摩切子復興の話を知り、鹿児島に来ました。

薩摩切子の創作活動は、伝統工芸を受け継ぎ、またその技術を次の世代に引き継いでいくという点で、歴史に残るものに携われるという魅力があります。また、表現したいことが切れ目なく湧いてくるため、創作意欲に満ちた毎日を送っています。

自然の美しい色をガラスに映し出す

錦江湾上から望む市街地の夜景

ガラスは見る角度や光の当て方によってきらきらした光を放ったり、しっとりとした色になったり、虹色に見えたり…。また、デザインしカットしたままの一面でもきれいなのですが、コップなど外側の表面から反対側のガラスと重ねるとまた別の模様や光を見ることができるんですよ。それが、ガラスの魅力ですね。



緑の中の渓流をイメージした水指（みずさし）（右）と青い海と夕焼けを表現したガラス

今までの薩摩切子は直線的なデザインが基調でした。その固定観念を取り除くことができないかと、新薩摩切子を発案しました。今までのシャープな模様に曲線的な模様を取り入れ、そして一色しか使わなかった色ガラスを2色組み合わせることで、今までにない色を表現しました。例えば、赤と青をあわせて紫、これは夕焼けをイメージし、青と緑で南国の青い海、みたいな感じですね。

［取材メモ］

ガラスの魅力を、優しく詳しく教えてくださった中根さん。空や海など自然の色をガラスの色・光・透明感で表現していることに感動しました。飾る楽しみ、使う楽しみなどいろいろな面で人々を魅了する薩摩切子にいつの間にか引き込まれてしまいました。

郷土が生んだ巨匠

ふるさと再発見 ～美術編～

海老原喜之助

文 市立美術館 山西 健夫

戦後の鹿児島の美術界は、昭和二十一年に創設された南日本美術展（南日本新聞社主催）を抜きにして語ることはできない。これは戦前の南国美術展を発展的に継承したもので、より規模の大きい総合美術展としてスタートしている。

終戦直後の荒廃した鹿児島に美術文化の芽を育み、市民に希望と潤いの心を取り戻してもらいたい。そうした願いを込めて南日本美術展を立ち上げたのが、鹿児島出身の二人の洋画家、海老原喜之助と吉井淳二である。現実には、美術どころではないという厳しい状況があったが、幸いにも多くの人の賛同を得て、同年十一月に第一回展が開催された。当時はまだ美術館もなかったため、鹿児島市役所と南日本新聞社が会場となっている。

海老原喜之助（一九〇四～一九七〇）は、明治三十七年鹿児島市住吉町に生まれた。鹿児島県立志布志中学校に入学すると、同級の吉井淳二らと刺激しあって油彩画を描き始めた。大正八年頃のことである。

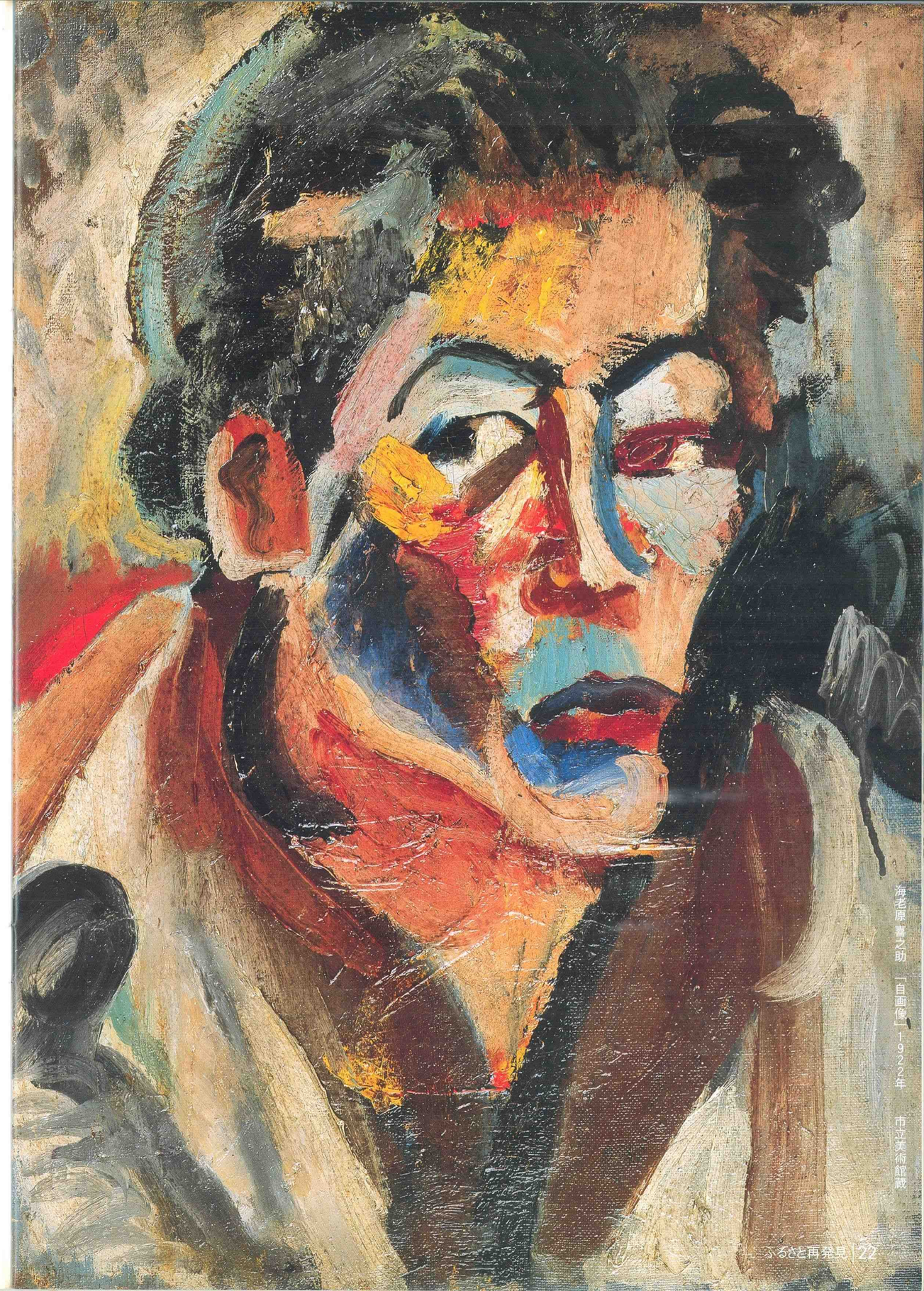
大正十一年三月になると中学の卒業を待たずに吉井とともに上京した。二人は代々木上原で共同生活をしながら川端画学校に通う。海老原は前年の夏休みに上京した際、有島生馬からフランス行きを勧められてすっかりその気になっていた。吉井と別れて本郷に転居したころにはフランス語を学び、洋行に備えている。そして、大正十二年六月、いよいよ横浜港から渡欧の途につくのである。

この渡欧の直前、海老原はそれまで描きためた自作約百五十点を焼却している。新しいスタートを切る儀式という意味があったのであろうか。その現場に立ち会ったのが画家の橋本八百二（やおじ）である。橋本はこの時、海老原から「自画像」「裸婦」「松林」の三点を譲り受け、その後大切に保管していた。

危うく焼失を免れた三点の作品は、平成十四年度に鹿児島市立美術館の所蔵品となった。このうち十八歳の「自画像」は、ほとんど自画像を残していない海老原の貴重な初期作品である。激しい筆遣いと奔放な色彩は若き画家の絵画への情熱を物語る。

今年は海老原の生誕百年にあたる。これを記念して市立美術館では六月に所蔵品による「海老原喜之助展」を開催する。この機会に海老原芸術の魅力を改めてご鑑賞いただければ幸いである。

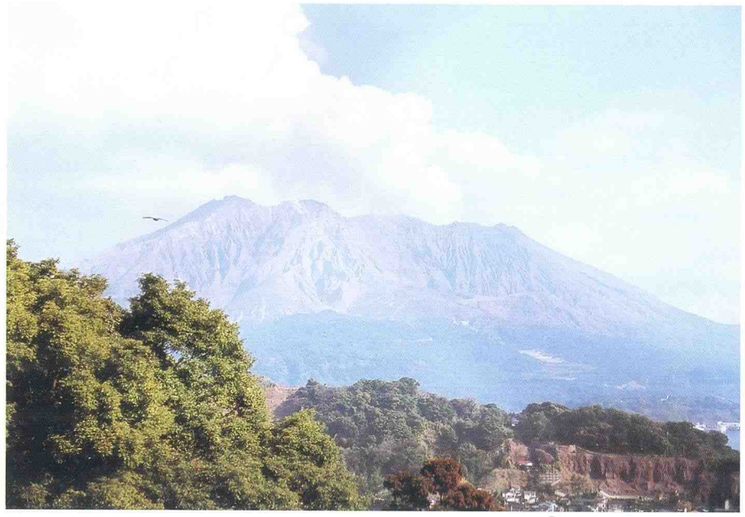
吉井淳二（左）と南日本美術展創設の相談
（南日本新聞社提供）



海老原喜之助「自画像」1922年 市立美術館蔵

「すべてはここから」

鹿児島玉龍高等学校写真部



「変わらぬ姿」　吉留　幸

「清瞬～青春～」　田中　美圭

「見守る歴史」　徳田　蓉子

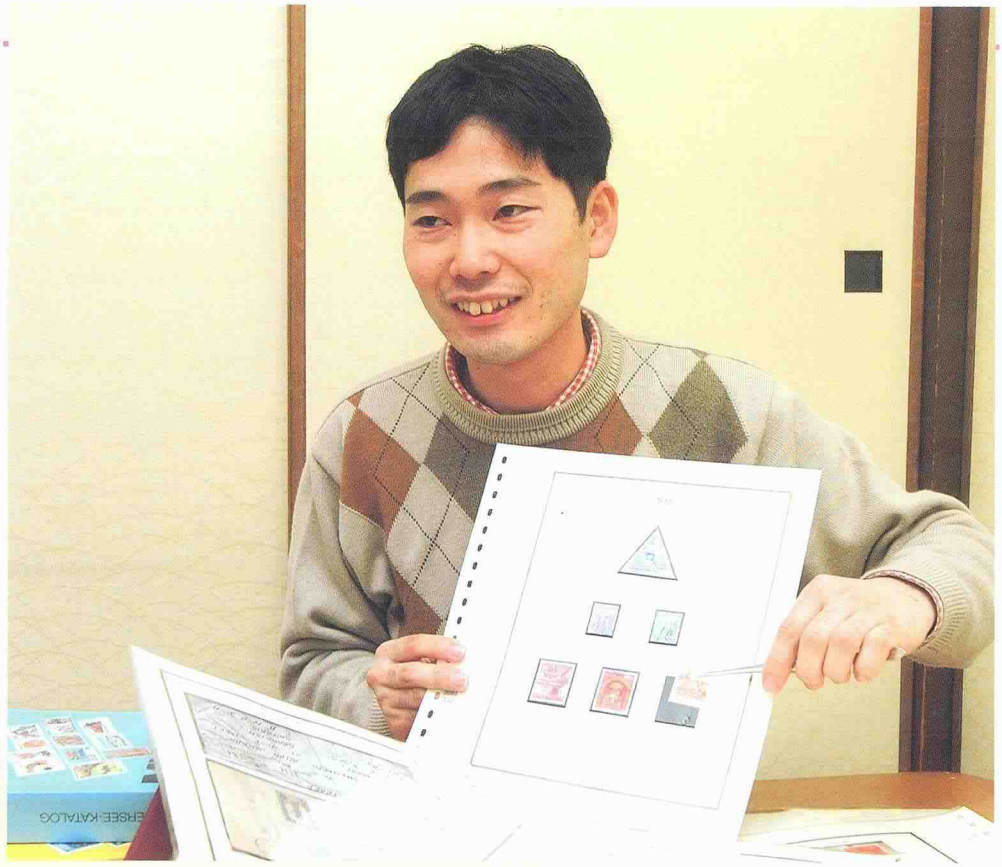
「ともだち 仲間」　上釜　彩乃

「つかの間の静寂」　今村　かおり

「秘密の庭」　坂元　美紀

切手収集

谷之口 勇 さん



一見、使い古された切手だが、よく見るとその色や形、図案はさまざま。

ていねいにピンセットで扱われ台紙にはってある谷之口さんのコレクションは、まさに宝物のよう。

切手収集はいつごろから

小学6年生のころから集め始めて、かれこれ20年ぐらいになります。

あのころはちょっとしたブームでしたが、ずっと続けている人は少ないでしょうね。

きれいに整理されているんですね。何枚ぐらいあるんですか

たくさんあって、数えたことがないなぁ。でも、暇を見つけて整理するようにしています。

趣向を凝らすと、1ページまとめるのに30分以上かかりますね。

外国の切手が多いようですが

切手を集めている人は、それぞれ好きなテーマを決めていることが多いんです。

わたしは主に外国の切手。韓国やネパールなどの切手が多いですね。切手からその国の当時の様子がうかがえるんですよ。

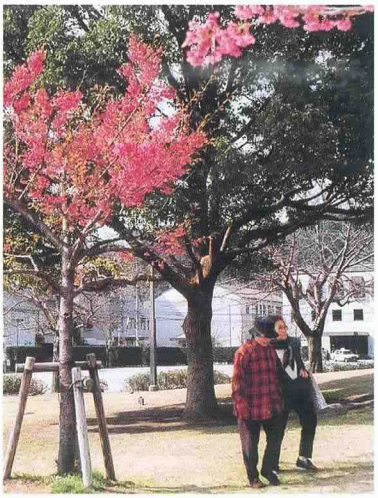
切手収集の魅力は

1人でマイペースでできることでしょうか。でも今は、インターネットのおかげで、切手を通じていろんな国の人とコミュニケーションをとることができます。若い人にもぜひやってみてほしいですね。

男性の趣味と思われがちだが、女性や子どもが楽しめるようなキャラクターの切手も。

街角ウォッチング

～草牟田周辺～



わが家の味じまん

「トンカツ」

「タコとワカメの酢の物」

佐田 詔八郎さん、和代さん夫婦と鹿児島商業高校の下宿生の皆さん

[西坂元町]

たくさん食べるために、背筋を伸ばして食事をとる。そのため、テーブルの脚はたたんだまま、あぐらをかいて食べる。

家庭の数だけ食卓があり、家庭の数だけ語らいがある。テーブルに広げられた自慢の料理は、家族の笑顔を演出する。

鹿児島市内におよそ23万7千世帯。一人から大家族まで食卓の風景はさまざま。わが家の味は家庭をどのように彩っているのだろうか。

練習を終えた生徒たちが、元気な声であいさつをしながら帰ってくる。ここ、佐田さん夫婦が経営している下宿では、相撲部とバレー部の13人が寝食を共にしている。

生徒たちの食事の世話をしているのが和代さん。下宿での母親役として、育ち盛りの子どもたちの食生活を支えている。

夕食は練習を終えた午後8時ぐらいから始まる。この日のメニューはトンカツ、タコとワカメの酢の物、ハマグリの吸い物、そしてデザートのオレンジ。

トンカツは「2人分か」と思うほどのボリューム。栄養のバランスを考え、キャベツもたっぷりだ。

そして圧巻は白ごはん。どんぶりに、しかもてんこ盛りだ。普通の茶わんの2.5倍の量をよそう。「相撲部の子には、体をつくるために最低四杯は食べさせます」と和代さん。エッ、じゃあ、茶わんで十杯分？「えぇ、夕御飯だけで三升炊きます。朝御飯やお昼の弁当も持たせるので、食費のやり繰りが大変」と笑う。

生徒たちは体が大きくて一見おっかないが、話してみると実に純朴な高校生。あぐらをかく足首にミサンガ（ししゅう糸などでつくったアクセサリー）を見つけ「彼女とおそろい？」と聞くと、周りがいっせいに冷やかした。

むさくるしい（失礼！）イメージのある男子生徒の下宿。でも、和代さんがつくった愛情たっぷりの夕御飯を囲んで、その後も和やかに食事が進んでいった。

今回のレシピ

「トンカツ」

1. 材料（1人分）

豚肉ロース約150～200g、卵1個、小麦粉、パン粉、塩コショウ、サラダ油

2. 調理手順

①豚肉の表面に軽く包丁を入れ、脂身の間にある筋を切る。
②軽く、塩コショウをふる。
③小麦粉をまんべんなくまぶす。
④溶いた卵をたっぷりつける。
⑤パン粉をつけ、形を整える。
⑥約170℃の油で両面をカラッと揚げる。油の大きな泡が小さくなり、パチパチと音がしたら出来上がり。

「タコとワカメの酢の物」

1. 材料（4人分）

ゆでタコの足（大きめ）2本、ワカメ10g、キュウリ1本、白キクラゲ15g、A（酢、みりん、青じそドレッシング、しょうゆを好みで）

2. 調理手順

①ワカメと白キクラゲは水に浸けて戻しておく。
②キュウリは小口から薄切りにして塩を少々まぶし、しんなりとしたら水気を切る。
③タコは適当にぶつ切り。
④Aを混ぜ、①②③と和える。

鹿児島市立科学館

「オデッサ隕石（いんせき）」

（鉄隕石）

1921年にアメリカのテキサス州オデッサ地方の直径170mの隕石孔で発見された実物の隕石で、大変貴重な物です。大きさは、約12cm×10cm×7cm、重さは3.6kgあり、表面は、焼けこげています。九州大学名誉教授坂上務氏より寄贈されたものです。

隕石は、太陽系の小惑星などが地球に秒速数十kmで落下してきたものです。落下時は、高温状態で爆発し、大きな隕石孔をつくります。地球上に年間1,000個以上の隕石が落下しますが、発見されるものは、せいぜい50個くらいです。石質隕石、鉄隕石、石鉄隕石の３種類があります。

鹿児島にも明治19年10月26日に大口周辺に隕石が落下しました。落下の途中で３個以上に分裂したようです。これを薩摩隕石といいます。

（鹿児島市立科学館 展示係長　宮下 守）

わが町上空
支所編

「東桜島支所周辺」

東桜島地区は、錦江湾に浮かぶ桜島の東半分を占めています。地区内のほとんどが溶岩原や原野で、集落は国道224号と県道桜島港黒神線の幹線沿いに立地しています。

写真右手前に見える東桜島支所、東桜島公民館、東桜島分遣隊、高齢者福祉センター東桜島、東桜島保育園、東桜島中学校など公共施設が整備された東桜島町は、地区の行政やコミュニティの中心となっています。

地区の人口は約1600人。手前海上に浮かぶカンパチの養殖いかだや、集落後方のビワを中心とした果樹栽培などにみられるように、農業・漁業が盛んで、第一次産業従事者が約35%を占めています。

東桜島地区は霧島屋久国立公園に属し、溶岩原や温泉などの観光資源に恵まれています。今後、それらを生かした観光ゾーンとしての魅力に、期待が高まっています。

市民フォト・鹿児島

NO.96

編集・発行／鹿児島市広報課　鹿児島市山下町11番1号　電話216・1133

印刷・レイアウト／渕上印刷株式会社

R100 この広報誌は、古紙配合率100%の再生紙を使用しています。